小金井の湧水点 part 3

☆⑥ 下弁天（元弁天）　貫井南町２－１

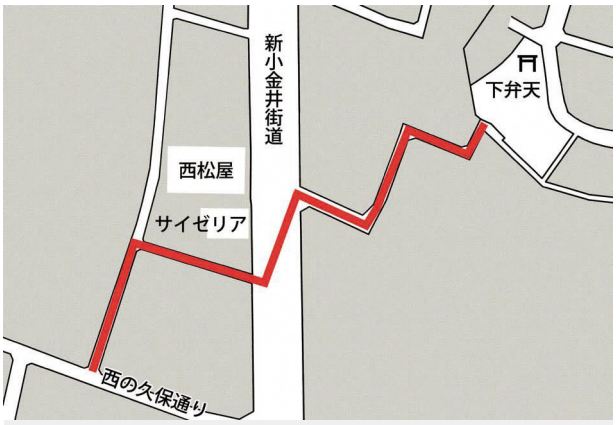
貫井南遺跡水源地

野川がほぼ直角に曲がる外角に勢い余った水流が水たまりをつくり、やがてそれが池になる。そこまでは想像がつきますが、その池から野川の水とは別に水が湧き出すのは、何かしら測り難い自然の力を感じます。「かま」と呼ばれた地下水の湧出が自然に対する畏敬の念を呼び起こし、弁財天（市杵島姫命）を祀る動機となったのでしょう。弁財天が中央の島に鎮座する弁天池（瓢箪池）は野川と繋がっていたので、湧水は野川に流れ込み、野川からは魚が入り込んできました。神域で釣り糸を垂れて大丈夫なのか不思議ですが、大正時代、弁天池が鮒釣りの名所であったと郷土史家星野進一は『小金井百一話』第五一話で感慨深げに回想しています。惜しむらくは弁天池の湧水は昭和30年代には枯渇、弁天池に因む小字名「池之上」も昭和34年の大字小字廃止によってなくなりました。池の記憶が再び「池の上通り」として復活するのは昭和48年のことです。小字池之上の東には小字大城堀が隣接しており、これは弁天池の別名「大蔵堀」に由来するものです。

さてこの弁天池には田んぼの溜池という役割もあり、弁天池を南西の隅とする野川と田用水一帯には、それと異なる２つの水系がありました。ひとつは滄浪泉園の池の湧水で、鈴木家の水車（弁車）を回したのち薬師通りを超えて南下しており（★④ 滄浪泉園 参照）、現在は遊歩道南６号線にその痕跡をとどめています。もうひとつは玉川上水の分水で平太坂（平代坂）を下り、前原神明宮の社殿前を通過していました。梶家文書（KS）の出所である平太坂の梶家では、この分水を利用した水車の建設を寛政元年（1789）には許可され、農業の合間に「自分飯料」のため、つまり自家用に水車を使用していました（KS433）。分水の下流には前原神明宮とその別当光明院の祀職を兼ねた梶家があり、こちらは光明院文書（KM）の出所です。光明院梶家も寛政11年（1799）に分水を利用し境内に「手前之飯料」のため、つまり自家用に水車を設置することを願い出ています（KM3）。しかし、こちらは実現したとする文書は残されていません。

下弁天
明治 15 年（1882）
弁天池の水が枯れてしまったことを除けば、現在も風景に変わりはありません。手前の赤線（赤道）は下弁天に通じる道。

『貫井村全図 坂下』明治８年（1875）
南から下弁天に通じる道は階段状に折れ曲がっています。



南から下弁天に通じる道は昭和 56 年の新小金井街道開通によって分断された箇所を除き残っています。

滄浪泉園入口の附近名所案内図より

「水車平」の印
明治27年（1894）
平太坂の梶平三郎が
経営する水車の印

分水跡の遊歩道　前原神明宮付近

分水に架けられた石橋の碑
明治19年8月
星野彦四郎奉納
前原神明宮所蔵

近世に成立したこの3つの水系のうち、野川と田用水が昭和戦前にかなり大掛かりに改修されています。野川の改修といえば昭和45年の小金井田圃最後の田植え以降の戦後の大改修を思い起こすでしょうが、想像以上に大規模な工事が戦前にもなされており、その分岐点となるのが松平実科女学校（まつだいらじっかじょがっこう）の造成です。

・野川　戦前の改修

私立松平実科女学校は昭和5年、地元大澤家の所有地に設立されます。その敷地を現在地でいえば大城橋から西之台橋までの野川東側の住宅地になります。校長には徳川家の御鷹場であった小金井にふさわしい松平家の松平俊子（1890～1985）を迎え、家事や裁縫など実務に力点を置いた教育がなされました。以下、松平俊子が自らの教育理念を説いた入学案内の一節です。

今回幸に古来歴史に由緒深き小金井の駅近き大澤泉園内の仙境を撰定いたしまして、此神聖な学窓に於て私の女子教育に於ける理想を実現する事にいたしまして、校舎を新築した次第であります。
松平実科女学校入学の栞（草稿）　昭和5年（1930）

文中の「大澤泉園」が気になりますが、大澤神社に残されている「小金井大澤泉園碑」は大正14年に建立されているので、少なくとも大正末期には存在したかのようです。ところが『小金井市史 通史編』には大澤泉園が未完成に終わったと考えさせられる記述があります。

武蔵小金井駅の誕生後、地元では貫井たんぼの公園化などを進めようとする動きがあったが、計画は頓挫、その跡地に同校が設立されたという（市誌Ⅴ　一〇二頁）。
『小金井市史 通史編』527頁
※「同校」は松平実科女学校

武蔵小金井駅の正式開業は大正15年なので、正確には大正13年の小金井花期仮駅設置後に「貫井たんぼ」を公園化しようとしたのが大澤泉園だとすると、計画された大澤泉園の敷地はかなり広いと考えられます。なぜなら松平実科女学校が造成された敷地は大字貫井ではなく、大字小金井だからです。松平実科女学校の敷地西側は字界で、野川を挟んだ西側が大字貫井です。「貫井たんぼ」は大まかな表現で実際には大字小金井にもまたがる弁天池を南西の隅とする水田地帯であり、一部畑を含んでいたと考えるのが妥当でしょう。ここには現在、前原町西之台会館、小金井前原町三丁目アパート、前原小学校などがあります。

小金井大澤泉園碑　大澤神社境内
大正14年5月10日　大澤賢治建立

東京府小金井村大澤泉園
松平實科女學校
省線武藏小金井驛南五丁
『松平実科女学校々則』より
住所は小金井村大澤泉園

この松平実科女学校の造成前後で野川と田用水の流路が著しく変化していることは、地図を見ればよく分かります。昭和7年の地図を見ると松平実科女学校の西脇を野川がまっすぐに南下しています。ところが昭和4年の地図では、のちの松平実科女学校の南西角地で野川はほぼ直角に曲がり東流しています。現在地でいえば豊住橋付近で曲がり始め、西之台橋の東で東流していました。松平実科女学校の校舎の上棟式は昭和5年1月31日なので、野川はそれ以前に造成を終え整地されていたはずです。昭和4年の地図には「昭和四年二月　調査」と記入されているので、野川の改修工事はそれ以降、おそらくは昭和4年

年内に実施されたと推測できます。昭和４年の地図には、松平実科女学校の造成によって埋め立てられた野川のすぐ南脇を平行する細流があります。この細流は野川の自然の流路ではなく、元々は江戸期に開削された水路です。

昭和恐慌のあおりを受けた松平実科女学校は極めて短命に終わり、代わって同所には通称「拓殖（たくしょく）」と呼ばれたひとのみち高等拓殖学校が設立され、校舎は松平実科女学校の校舎をそのまま流用したようです。この拓殖も長続きせず、さらに同所には毛利龍三がモーリ農園を設立、都内で展開していたモーリ食堂で使う食材を生産していました。モーリ農園は戦後も継続して経営されましたが、昭和30年の地図を見るとモーリ農園の東側、野川を断ち切った跡が池になっています。この溜池があった場所の現在地は前原小学校北西の住宅地です。通称「モーリの池」と呼ばれ子どもたちの絶好の遊び場でしたが、ここで遊んだ子どもの一人に前原町に実家があった鈴木晋一郎先生（大阪大学名誉教授・工学博士）がいます。モーリの池はよほど印象に残ったようで、その思い出を確かめにわざわざ当館を訪れたほどです。

※ 以下、地図・絵図上のＡは野川の合流点（現 前原小学校校庭）、Ｂは田用水の合流点（現 小金井前原町三丁目アパート集会室付近）

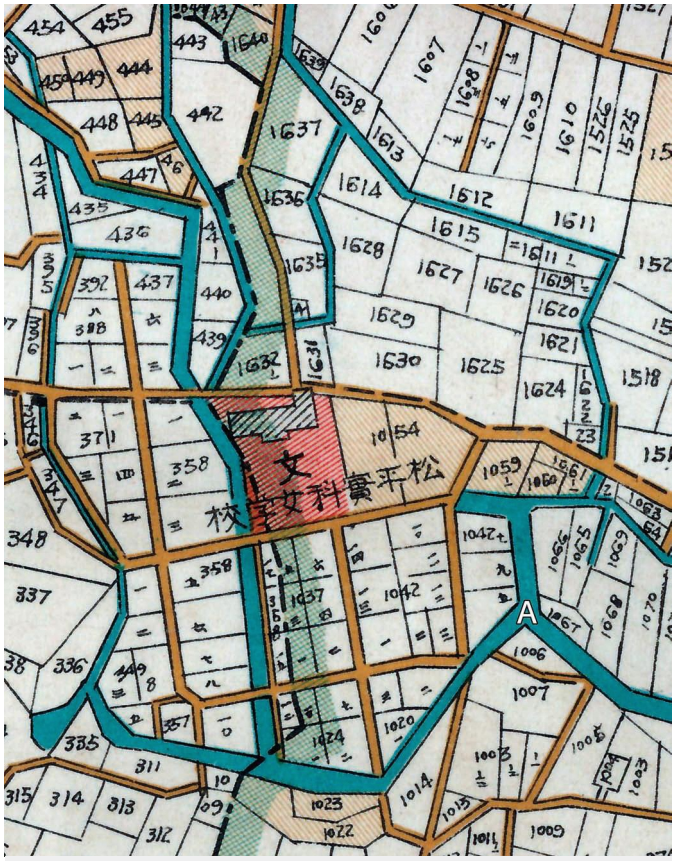
昭和４年（1929）の地図　『小金井村全図 南半部』
製作者は記載されていませんが、体裁はムサシ測工所製作の地図に似ています。弁天池は記入されていません。

松平実科女学校、ひとのみち高等拓殖学校、モーリ農園と目まぐるしく変転したこの地は、拓殖の時代には「首塚（くびづか）・胴塚（どうづか）」の発掘調査、モーリ農園の時代には現在当館に展示されている蔵骨器（ぞうこつき）の出土と、続々と中世の遺物が調査発見されています。

小金井の首・胴塚　大規模な発掘
〝謎〟かくて明みへ

北郡小金井村小金井の人の道学園入口北側から校舎裏に至る畑は、近く東京府史跡係矢口貢、稲村坦元氏等の指揮の下に大規模の発掘をなすが、同所には最近まで首塚、胴塚と称する二個の丸塚が四間位の距りで東西に並び、古来その塚に手を触るゝ者は禍を受けると口碑に伝えられ、耕作者も往昔の姿を保持し来つたが、同畑を借地した人の道学園ではそうした由来を知りつつも開墾、全く坦地と化し現在清菜が植られてゐるが、各方面の調査を綜合すると或は新田義宗当時の戦死者の墓ではないかといふので、府では重大視し、鬼が出るか仏が出るか発掘をする事になつた。（後略）

読売新聞　昭和11年（1936）1月12日
『小金井市史 資料編 近代』748頁
※「北郡」は北多摩郡の略



昭和７年（1932）の地図　『小金井村全図』谷田測量社
南西の隅（左下）に弁天池。

この記事を読むと拓殖が首塚・胴塚を取り壊し更地にして野菜畑にしたのち、東京府が調査発掘をしたということが分かります。ならば松平実科女学校の時代は触らぬ神に祟りなしで放置されていたのでしょうか。これに先立つ昭和９年１月に小金井尋常高等小学校（現 第一小学校）の訓導（教師）らが編纂発行した『小金井村郷土誌』の「光明院址」の項目には、首塚・胴塚という呼称を挙げてはいないものの、それらしき記述があります。

この附近は古代から開けてゐたと見え石器が沢山発見された。尚丸塚が二つあって上に五輪塔・青石塔婆があった。五輪塔の総高さ二尺五、六寸、円形土塔の上に立ってゐたといふ。

『小金井村郷土誌』昭和９年（1934）

過去形で書かれているので、昭和９年１月の時点ですでに２つの丸塚は取り壊されていたようです。この２つの丸塚を首塚・胴塚とすると、拓殖は昭和７年末には設立を決定しているので、首塚・胴塚の取り壊しは昭和８年頃と推定できます。首塚・胴塚について記録をこれ以上遡ることはできず、いつから首塚・胴塚と呼ばれるようになったのかも分かりません。同様にモーリ農園の時代に蔵骨器が出土した年も曖昧で「昭和10年頃」としか分かっていません。

このように基本的な事実確認がなおざりにされた首塚・胴塚と蔵骨器ですが、戦前は金井原古戦場と結び付けられ熱狂的に取り沙汰されていました。南朝新田勢が賊将足利尊氏に勝利した金井原古戦場は、皇国史観の影響下にある戦前では称揚すべき出来事であり、首塚・胴塚と蔵骨器に対する関心も金井原古戦場が東京都史跡に指定された昭和11年前後で盛り上がりを見せています。しかし、それに先立つ松平実科女学校の造成や昭和４年の野川改修工事に伴う出土物の記録はありません。そもそも戦前の野川の改修を考慮に入れた「貫井たんぼ」一帯の発掘調査史を見たことがないのです。

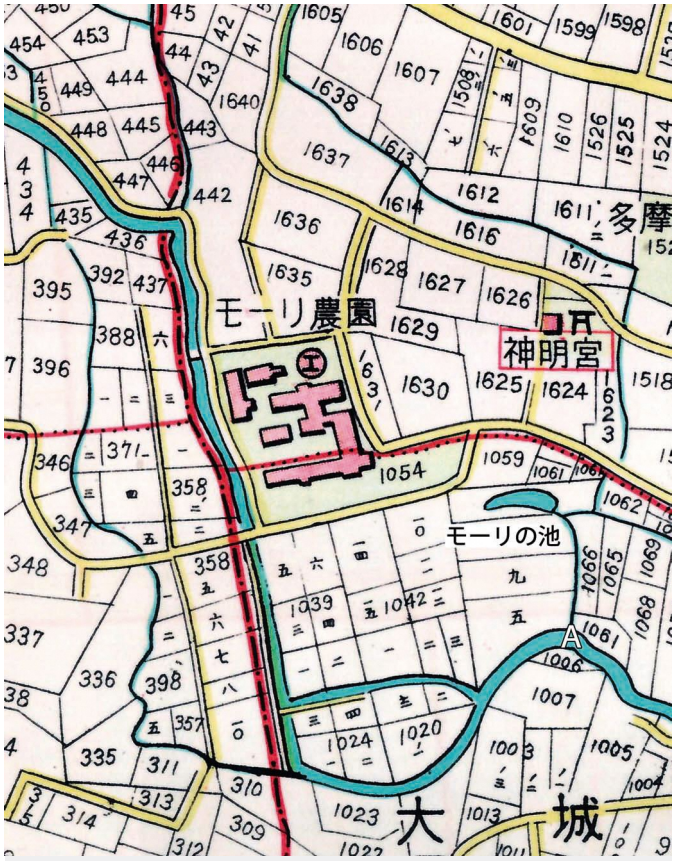
四割堰
昭和30年（1955）5月　水澤静男撮影

中前橋の下流（東）にあった四割堰は小金井市域では最後まで残った堰。写真左側、竹を杭木に編み込んで野川をせき止めているのが分かります。竹と杭木は堰の伝統的な用材。

・野川を渡る掛樋

明治６年、地租改正により明治政府は近代的測量技術による地図の作成を全国に命じます。小金井村と貫井村では難航の末、明治８年に小金井村全図・貫井村全図としてようやく完成を見ます。明治８年は小金井における地図の始まりの年であり、それ以前は測量によらない多分に主観的な麁絵図です。今回は弁天池を南西の隅とする水田地帯を取り上げていますが、ここは小金井村と貫井村にまたがっており、２つの地図を合わせ見ることで初めて明治８年の「貫井たんぼ」が俯瞰できます。この明治８年の小金井村全図・貫井村全図と昭和４年の地図を比較検討したところ、３つの水系に根本的な変化がないことに気づきました。つまり、野川と田用水・滄浪泉園の池の湧水・玉川上水の分水は明治８年から昭和４年までほぼ変わっていないのです。

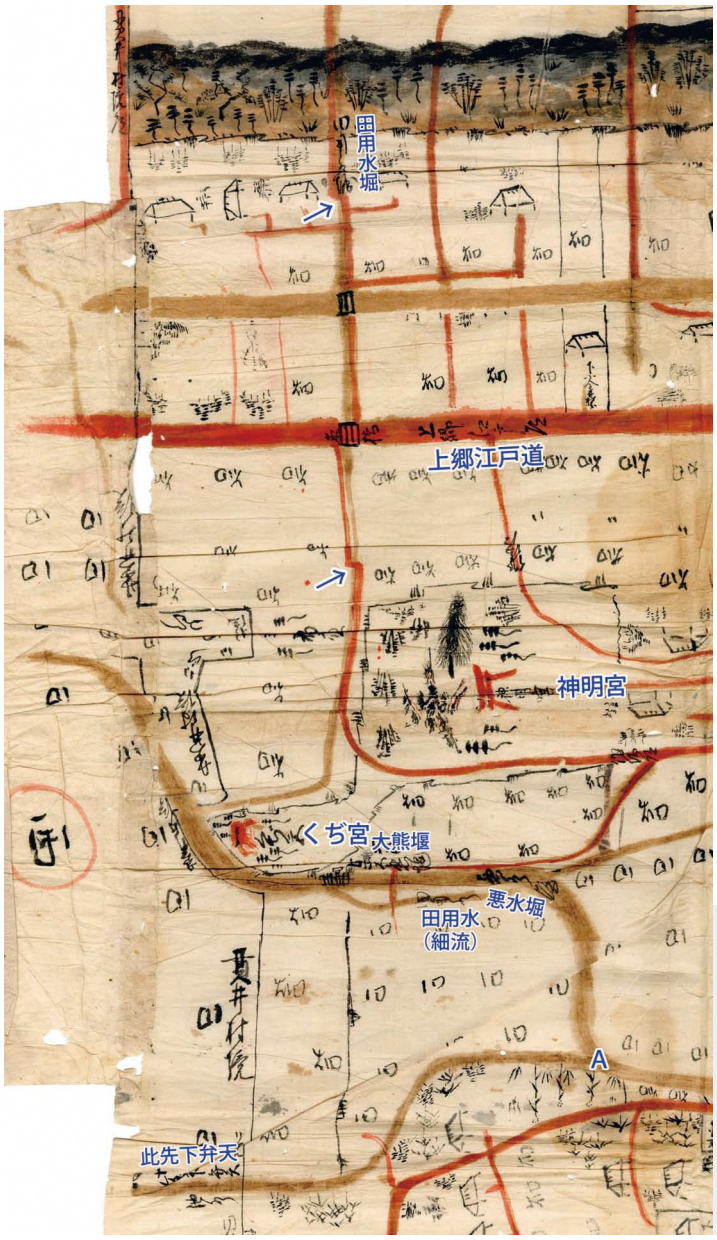
この松平実科女学校造成前の地図を念頭に、さらに江戸期にまで遡り近世梶家文書の絵図を見ると、描き入れられた対象がどこなのかある程度読み解くことができます。例えば小金井村絵図（KS569）では、前原神明宮がある土地から野川がほぼ直角に曲がる西側の土地まで地続きに囲まれています。この囲まれた土地が「中丸」と呼ばれた土地なのか定かでは



昭和30年（1955）の地図　『小金井町全図』アトラス社
弁天池は記入されていません。モーリ農園の増改築、現 市道第39号線の改廃については詳細不明。

ありませんが、西側の土地は昭和になって松平実科女学校が造成された土地です。ここに何やら鳥居のようなものが描き込まれ文字が記入されています。首塚・胴塚があったとされる場所なので気になり、複数のくずし字読み下しの専門家に確認したところ、「くぢ宮」であるとの結論で一致しました。「くび宮」ではなく「くぢ宮」です。「くぢ宮」の意味は不明ですが、前原神明宮とは別の「宮」が描き入れられていることには違いありません。

梶家文書には「貫井たんぼ」一帯の河川と堰（せき）や掛樋（かけひ）といった水利施設の絵図も豊富に残されています。そこに描かれた流路は今まで誰も指摘しなかったのが不思議なくらいに、明治８年と昭和４年の地図に見る流路に相似しています。例えば享保（きょうほう）５年の絵図（KS587）や寛保（かんぽう）４年の絵図（KS562）には、南西の隅の弁天池・野川の合流点（A）・田用水の合流点（B）・野川のすぐ南脇を平行する細流が描かれていますが、これらは明治８年と昭和４年の地図でも確認できます。この近世の絵図に見る流路が松平実科女学校造成前の近代の地図に見る流路と変わらないと仮定すると、絵図のみにある堰や掛樋の現在地が推定できます。梶家文書に見る堰や掛樋の位置を明治８年と昭和４年の地図に落とし込み、さらに現代の地図と照らし合わせて計測した現在地とその地歴は以下の通りです。



■ 大熊堰
西之台橋から東へ30ｍほどの地点・松平実科女学校の南西角地・「くぢ宮」付近・貫井村と小金井村の村境の東側（小金井村側）

■ 神明前掛樋
大熊堰のすぐ東側（下流）

■ 横まくり掛樋
（別名 横まくり筧・箱とい用水・横まくり箱樋・横まくり箱樋筧）
前原小学校北西の住宅地・前原小学校正門から30m ほど西にある駐車場付近・モーリの池があった場所

■ 大蔵堀堰
野川はなみずき公園の西端付近・貫井村と小金井村の村境の東側（小金井村側）

堰や掛樋の現在地が明らかになれば、その周辺の近世の地名も明らかになります。「神明前」「横まくり」「大蔵堀（大上堀）」はいずれも検地帳に記載がある当時の字名です。従ってこれらの堰や掛樋の周辺が、江戸期には神明前・横まくり・大蔵堀という地名であったことになります。「横まくり」の語源はおそらく、現在の前原小学校の西校舎付近で合流点（A）に向かってほぼ直角に曲がっていた野川でしょう。この「字（あざ）横まくり」にあった横まくり掛樋（筧）は横まくり堰の上にあり、堰と掛樋は一体のものとして扱われています。

横まくり堰　是ハ筧ニも仕候
（KS178）明和（めいわ）８年（1771）

小金井村絵図（KS569）　宝永（ほうえい）５年（1708）以降

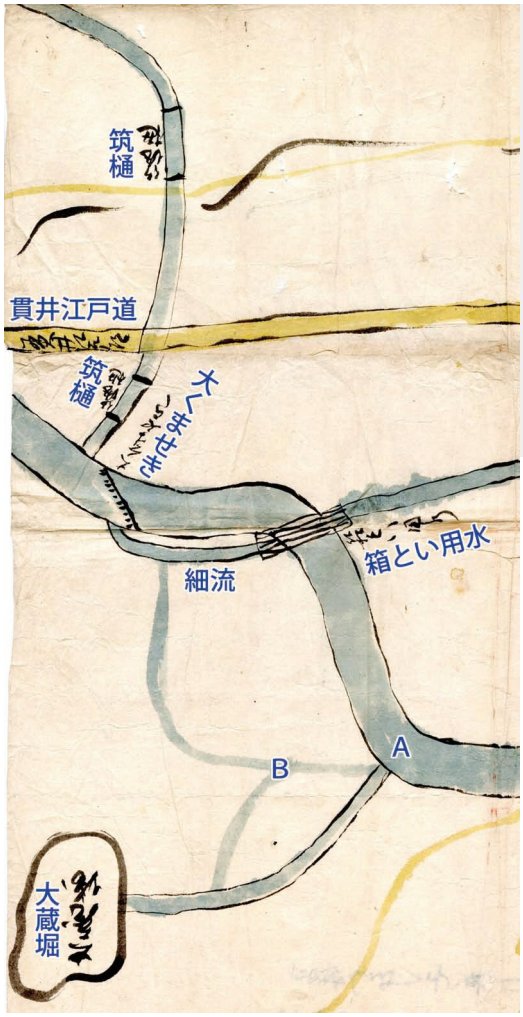
「田用水堀」があるのは平太坂、「上郷江戸道」は薬師通り、「悪水堀」は野川、「田用水」は野川のすぐ南脇を平行する細流。下弁天は「此先下弁天」として記入されていません。色々と謎が多い絵図で、国分寺崖線上を東西に川が流れ、平太坂には橋が架かっています。
前原神明宮を経由する分水路は記入しておらず、平太坂から現 市道第39号線と考えられる道に沿って南下した玉川上水の分水は、西に曲がって現 大城橋付近で野川に接続しています。矢印の二か所、分水が赤道の東側から西側に移る地点は、「伏せ越し」と推定しています。

横まくり掛樋が堰の上を渡る構造であったことは、用材の記録を見ても明らかです（KS29）。掛樋の部分は松の木の板を組んで樋を造り、松の丸太２本を横の張り木に、ヒノキの丸太８本を立柱にして造作したものです。堰の部分は葉竹200本、杭木16本をその用材としています。掛樋の部分は野川を斜めに横断するため、川幅より長めに長さは五間（約９m）ありました。

横まくり箱樋　長五間　御公儀様御入用ニ御座候
（KS85）寛保３年（1743）

「御公儀様御入用」とあるのは御入用普請（ごいりようふしん）のことで、幕府が維持費を賄っていたことを意味します。こうした横まくり掛樋の用材、サイズ、あるいは工事に要した人足数などは文字による記録が残っています。しかし、そもそもの目的、どこに水を供給するために横まくり掛樋を造ったのかを書き残している文書はありません。そこで享保５年の絵図（KS587）を元に順を追って考えてみます。まず大熊堰を造って野川を一旦せき止め、その上流の水位を上げる。これは野川の水面が田んぼより低いためです。次に野川の水を大熊堰の上流から細流を通じて箱とい用水（横まくり掛樋）に流す。横まくり掛樋を使って本流を越えた野川の水は、現在は道として残る前原小学校の北を流れていた田用水に接続する。つまり横まくり掛樋を造った目的は、前原小学校の北を流れていた田用水に水を行き渡らせるためということになります。また、この絵図には細流から田用水の合流点（B）へ向かう流路も描き入れられています。合流点（B）への給水もこの仕組みを造った目的のひとつでしょう。この２か所に水を補給する仕組みは、実際には大熊堰がうまく機能しなかったことが原因で村の一大問題になっています。大元の大熊堰がダムアップして水位を上げていなければ、この仕組みは元も子もありません。享保５年から十年後の享保15年、村では新たに分水路を２つに分け玉川上水の水の導入を決めています。

享保十五年といえば、しきりに上水からの分水を願い出ている時期であるが、上小金井村の全員連名して新しい用水路建設を決定している。その事情は、大熊堰が沼であるため水保ちがわるくて困るので、坂下築樋の土をあげ、神明山に新堀を掘り、二本の水路とし、一本は大熊堰付近を「ぬり樋」にして通し、一本は光明院境内から八右衛門畔を経て田用水に入れ、太兵衛下まで通すこととする。（後略）

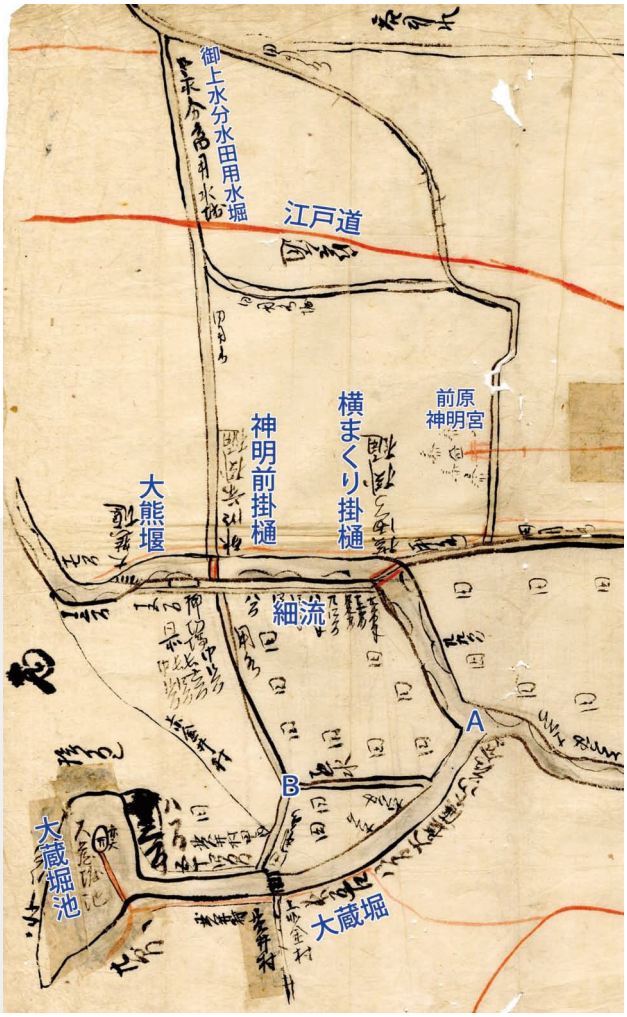


享保５年（1720）の絵図（KS587）

「大蔵堀」は弁天池、「箱とい用水」は横まくり掛樋。「貫井江戸道」は薬師通りと思われます。
二か所の「筑樋（築樋）」は「伏せ越し」と推定。築樋がある水路は、小金井村絵図（KS569）にある分水路と同一と考えています。この水路が滄浪泉園の池の湧水である可能性も考えてみましたが、だとすると築樋に相当するものが思い当たりませんでした。

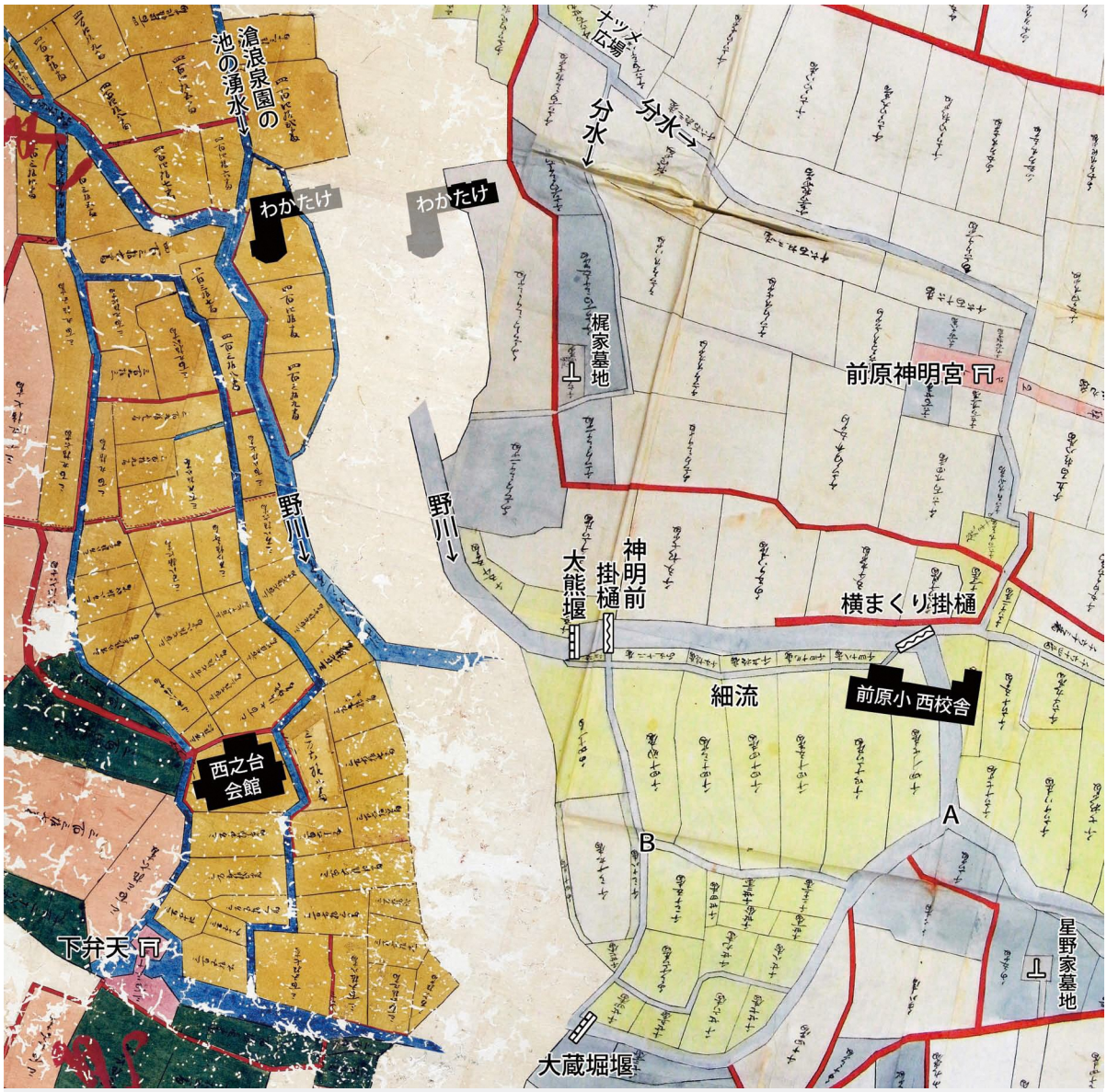
寛保４年（1744）の絵図（KS562）

「御上水分水田用水堀」があるのは平太坂、「江戸道」は薬師通り、「大蔵堀池」は弁天池。「大蔵堀」は字名として記入され、大蔵堀堰は絵のみ描き入れられています。
この絵図には明治以降の地図では確認できない玉川上水の分水路が、２つ描き入れられています。
ひとつは平太坂を南下する流路とは別に国分寺崖線上をカーブして前原神明宮を通過する流路に合流している流路、もうひとつは神明前掛樋に直結する流路です。



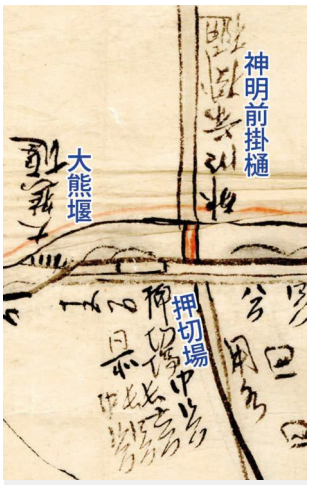
『小金井市誌Ⅱ歴史編』224頁

この解説の出典は享保15年（1730）に作成された『用水新堀につき上小金井村惣百姓連印証文』（KS329『小金井市誌 Ⅲ 資料編』326頁）です。大熊堰は「沼堀（KS329）」と表現され、その不調が2つの分水路建設のきっかけとして挙げられています。そこで「坂下築樋土置上げ（KS329）」たとあります。ここにいう築樋とは伏せ越し工法による逆サイフォン式のトンネル水路で、「土置上げ」とは土を盛って勾配をつけ水の勢いが増すようにしたと筆者は解釈しています。絵図を見ると、この築樋＝伏せ越しは分水路を2つに分ける前からあったように思えます。享保5年の絵図（KS587）には野川に直結する水路に南北2つの築樋があります。小金井村絵図（KS569）には野川に直結する分水路に南北2つの伏せ越しがあります。北の伏せ越しは平太坂の途中で分水が梶家のある坂の東側から西側にくぐっていた地点で、戦後も残っていました。南の伏せ越しは明治以降の地図には見当たりませんが、薬師通りを越えた分水が二又に分岐する手前にあったと推測しています。現在地でいえばおおよそナツメ広場の付近で、ここの「坂下築樋」の土を置上げたと考えています。土を盛って勢いの増した分水は、前原神明宮や光明院を経由する流路と「大熊せ

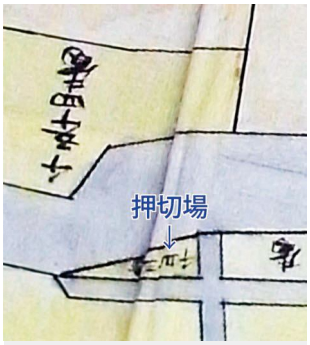


明治8年の貫井村全図（左）と小金井村全図（右）を合成

近世の水利施設、大熊堰・神明前掛樋・横まくり掛樋・大蔵堀堰の推定位置を近代の地図に配置したもの。
下弁天・前原神明宮・梶家墓地（前原町3-12）・星野家墓地（前原町5-20）は江戸時代から位置は変わらないと考えられます。梶家墓地の西側を通る赤道は現 市道第39号線。前原小学校の西校舎・前原町西之台会館・わかたけ保育園・ナツメ広場は現在地確認の目安として記入。わかたけ保育園が現在ある土地は、貫井村と小金井村にまたがっていました。



寛保4年の絵図より大熊堰と神明前掛樋があった付近を拡大。
四角で囲った土地を「押切場」と記入しています。



大熊堰と神明前掛樋があった付近を拡大。十字に交わる水路は明らかに人工的。
野川との間の不自然に余った土地を、寛保4年の絵図では「押切場」と記入しています。

き近所ぬり樋致し（KS329）」て通した２つの流路に分かれます。「ぬり樋」では意味不明なので、くずし字読み下しの専門家に確認したところ、「ゐり樋（圦樋）」と読めるとの指摘がありました。圦樋ならば意味が通り、これが「大熊せき近所」にあった神明前掛樋を指しているのはほぼ間違いないでしょう。

神明前掛樋を造った目的、これも絵図により推測するしかありませんが、田用水の合流点（B）に水を供給するためとしか思えません。大蔵堀堰を造った目的も合流点（B）に水を供給するためで、野川の水に加えて弁天池の湧水も役立ったのでしょう。寛保４年の絵図（KS562）を見ると、薬師通りを越えた分水は前原神明宮を経由する流路と二又に分岐したのち、まっすぐに南下して神明前掛樋に直結しています。明治以降の地図では神明前掛樋に直結する流路はなく、確認できるのは戦前まであった滄浪泉園の池の湧水に接続する流路です。また小金井村絵図（KS569）では、分水は現在の大城橋付近で野川に接続する流路のみ描かれています。進路変更の詳しい経過は不明ですが、享保15年に決定されたのは神明前掛樋に直結する流路の建設です。この計画は果たして成功を収めたのでしょうか。明治８年の地図に配置した神明前掛樋の南側には、合流点（B）へ向かう明らかに人工的に造成した水路があります。しかし掛樋の北側は分水路に繋がっていません。貫井村と小金井村にまたがる「貫井たんぼ」のうち、合流点（B）の西横だけが田んぼではなく畑なのも気になります。最終的に功を奏したのか、かなり怪しいのではないでしょうか。

もうひとつの分水路、前原神明宮や光明院を経由する流路は、最後に前原小学校の北を流れていた田用水に到達するので、ここに水を供給するのが目的なのは明らかです。以上の享保15年前後の経過をまとめると、前原小学校の北を流れていた田用水と合流点（B）への注水は享保15年より前から試みられ、大熊堰・細流・横まくり掛樋を造り野川の水を注水した。しかし大熊堰の不調のため、享保15年には新たに２つの分水路と神明前掛樋を造り玉川上水の水を注水することが決定された。寛保４年の絵図（KS562）に見る水利施設は全てが一度に造られたのではなく、安定した注水が難しかった前段階の水利施設もそのまま残されていると考えられるのではないでしょうか。

さてここまで読み進めてくれた方は、玉川上水の分水が野川周辺では田んぼへの給水路として使われたことがお分かりになったと思います。実際、梶家文書中の絵図には分水は「田用水」と書き込まれ、平太坂の梶家の水車も「田用水捨水」を動力源にしています（KS433）。では野川はどうかというと、絵図には専ら「悪水」と書き込まれています。何万年とかけてその沿岸部を田んぼが作れる肥沃な黒土に耕してくれた野川に対して、随分な言いように思えます。不思議に思い根岸茂夫先生（小金井市史編さん委員長）に尋ねたところ、「悪水」は排水を意味するとの回答でした。田んぼより水位が低い野川は主に排水路として使われ、使用用途を「悪水」と書き込んでいるのであって固有名詞ではない。「田用水」は田んぼへの給水、「悪水」は田んぼからの排水と理解すべきだと教えていただきました。「悪水」と呼ばれた仙川は使用用途が固有名詞に転化した事例でしょう。では野川周辺地域の飲み水はどのようにして確保していたのでしょうか。

当村ニハ呑用水前々より無御座候　井戸御座候
（KS178）明和８年（1771）

すでに２つの分水路は建設済みなのに「呑用水」は前々からなく、飲料水は井戸水としています。近世における野川周辺地域の水の用途は、我々現代人の先入観とはかなり落差があるようです。

以上、江戸期の田用水確保のための悪戦苦闘の痕跡を、明治の地図から辿ってみました。しかしその痕跡である細流や合流点（B）は、昭和４年の野川の改修によって埋め立てられてしまいます。昭和５年には松平実科女学校が設立されますが、一女学校が野川の改修のような大規模工事を行えるのか疑問です。松平実科女学校の設立は村を挙げての事業であり、だからこそ野川の改修が可能であったのではないでしょうか。野川は小金井村が日の出の勢いで近代化を遂げた戦前に改修され、加えて戦後にも改修されています。現在の野川は江戸期とは程遠い状態ですが、田んぼの溜池であった弁天池は今もひっそりと南西の隅に佇んでいます。

【以下、次号に続く】

蔵骨器　当館所蔵
推定製作年代　14世紀後半頃

小金井市文化財センター通信 №.3
小金井の湧水点 part 3
文／構成　多田 哲（学芸員）
令和５年３月31日 発行

小金井市文化財センター
（旧 浴恩館）
小金井市緑町３－２－37
（浴恩館公園内）
☎ 042-383-1198